

# 回遊性魚類およびイカ類を対象とした移動式小型定置漁具開発試験

(第2 県土水産資源調査)

福井克也・村山達朗

## 1. 研究目的

近年、急速な衰退が目立つ小型定置網漁業に換わる漁法として、初期投資が少なく、少人数で操業が可能な移動式小型定置漁具（以下、底建網）の開発を行なう。

## 2. 研究方法

### (1) 試験操業

秋田県で使用されている底建網を基に作成した漁具を、松江市恵曇地先の水深 60~70m の水深帯に 2 統設置して試験操業を行った。昨年までの試験操業では、漁具を固定しているアンカーを移動させてから、漁具の箱網部分を全て船上に引き上げる方法で漁獲物を取り上げていたが、本年は海面まで網を引き上げた後、箱網部分を舷側に寄せ、袋網部分のみを船上に引き上げ、漁獲物を取り上げる「寄せ網」方式へと操業方法を変更した。

## 3. 研究結果

操業は 2009 年 3 月から開始し、12 月まで行った。その間の水揚げ日数は 12 日であった。水揚げ日数が少ない理由は、早い潮流により揚網が不能であった期間が長かったことと、アンカーの把駐力不足によって漁具の移動が頻繁に発生したためである。特に 7、8 月の 2 ヶ月間は早い潮流により、全く操業ができない状況であった。

漁獲量、水揚金額については、漁獲量が 2,513 kg、水揚金額 68.1 万円であった。操業 1 回あたりの漁獲量及び水揚金額の平均値は、それぞれ 209.4 kg、5.7 万円であった。操業 1 回あたりの漁獲量と水揚金額を昨年 1 年間の操業実績と比較すると、漁獲量で 4.3 倍、金額で 2.1 倍の増加となっており、操業方法と操業場所の変更により漁獲成績が改善された。漁獲物の魚種組成も、昨年と比べ大きく変化した。昨年の魚種組成は、マアジ (15%)、マトウダイ (18%) カワハギ類 (39%) その他

魚類 (28%) であったが、本年はマアジ (82%)、マトウダイ (6%)、タイ類 (4%)、カワハギ類 (4%)、その他魚類 (4%) となり、マアジの漁獲割合が大幅に増加した。マアジの漁獲は、揚網が可能となった 9 月に水揚げされたものが大半であった。

近接した状態で 2 統の漁具を設置したにもかかわらず、マアジの漁獲は水深 60m 帯に設置した漁具に集中した。水深 70m 帯に設置した漁具は、タイ類やクロソイ等のその他魚類の漁獲が多く、水揚げ量も少なかった。本漁法の導入試験前に実施した秋田県への視察記録によると、「網口側に瀬がある漁場は、魚の入りが悪い」との秋田県漁業者からの指摘がある。そのため、漁場周辺の魚礁沈設状況を調べたところ、水深 70m 帯には網口側に多数の魚礁が沈設されていることが判明した。このことから、近接する 2 統の網で漁獲される魚種と漁獲量が大きく異ななった原因として、網口側に魚礁が沈設されていたことが考えられた。

これまでの漁獲成績を基に、底建網漁業が本県沿岸で専業として操業可能か試算を行ったが、専業による操業は、操業範囲が漁業調整上大きく制限されている現状では困難であると判断された。しかし、定期的な操業が可能な漁場であれば、2~3 統程度の事業規模で他漁業との組み合わせで操業することは可能と考えられた。